

ジェンダー研究と歴史展示の課題

Gender Studies and Challenges of Historical Exhibitions

トノムラヒトミ

TONOMURA Hitomi

①ジェンダーとは？

②表象

③結論

[論文要旨]

本論文は、歴博における「歴史展示におけるジェンダーを問う」という課題提起にたいして、I. ジェンダーの語の意味と用法の変化、II. 表象、の二つの視点から検討し、新たな理論の必要性と、博物館組織のあり方を論じるものである。

ジェンダーの語には、すぐに置き換えられる日本語がない。また、英語の意味自体も、二項対立的な捉え方から、時と場所によるパフォーマティブで変容的な理解へと変化してきた。さらに、日本における gender の用法は、個人のアイデンティティに近く、現段階の日本が高度にジェンダー化された社会であるにもかかわらず、ジェンダー概念を真摯に取り入れる動きは乏しい。

表象の点では、ジェンダー考古学の進展を受けて行われたオーストリアでの先史・原始時代の博物館展示のキャプションの計量テキスト分析、およびマンチェスター博物館において行われた自然史展示の自己点検の成果が注目される。オーストリアの分析によれば、武器を持つ人間は常に男とされており、女性はごく限られた活動に従事し、女性像の表象も、政治・経済・生活動の中で重要性の低いステレオタイプなものが多いことが論証されている。マンチェスター博物館の事例では、雌より雄の展示が多く、陳列やキャプションを通して「伝統的」なジェンダーロールが社会的に再認識させられていることが明らかになった。

これらの問題に取り組むうえでは、「単一のカテゴリー軸」であるジェンダー、階級、人種などの研究枠組を超え、特定の社会的政治的状况における力の不均衡が重層的に重なり合う形態に着目する、インターセクショナルリティの概念が有効であろう。また、ステレオタイプ化した現代のジェンダー・ロールを展示に持ち込まないためには、ジェンダー重視の意識を持つ研究者が一定数に達し、博物館が組織としてジェンダー・エクイティ（均衡）推進の必要性を自覚することも必須である。

【キーワード】 ジェンダーと博物館 表象 ジェンダー・ロール インターセクショナルリティ
ジェンダー・エクイティ

博物館は個人の生活を豊かにし、コミュニティに社会サービスを届ける存在である。国際的な博物館学者の言葉に倣うなら、現代の博物館は「社会的責任」を担うことを目指しているといえよう⁽¹⁾。歴史博物館が担う役割は、歴史的な絵図や物語という表象を介して、知見を広く社会に知らしめるという点で極めて大きい。また、来館者が、いにしえの人々が創り上げた美術工芸品や視覚資料を目にし、自身の人生や社会について思いを巡らせる場としての役割もある。

国立歴史民俗博物館がジェンダーをテーマに継続的に実施している研究集会では、今回、「歴史展示におけるジェンダーを問う」として、学問上の傾向だけでなく、現在の日本の社会的風潮と政治情勢に関係の深い重要課題を取り上げている⁽²⁾。しかし、この問いに対する答えを見つけることは容易ではない。まず、焦点となる「ジェンダー」の定義が難しい。この用語が英語圏における学術的ディスコースの主流に加わった 1980 年代以降、その意味と用法は変化してきている。その上、日本社会に英語の gender という用語が移植され、日本語で「ジェンダー」として定着したのちの、用語の意味と用法も検討する必要がある。

①……………ジェンダーとは？

「ジェンダー」は、女性解放運動や北米の大学で盛んになった女性に関する学際的研究によって、1960 年代から 1970 年代に人類学者や社会学者の語彙の中で力強い概念となった。学者は性差を意味する「ジェンダー」と「セックス」を厳密に区別しようと試み、1970 年代には後者の用語は、各個人に固定の生物学的特性であると解釈された。一方、ジェンダーは、社会の中で構築され、認識され、変更可能なものとされた。

それまで「ジェンダー」という用語は主に、フランス語やドイツ語、ギリシャ語、ラテン語などにみられる文法標識として認識されていた⁽³⁾。これらの言語では名詞はジェンダーによって男性、女性、中性に分けられる。例えばフランス語で le musée（博物館）や un livre（本）は男性名詞、la mer（海）や une fleur（花）は女性名詞である。この言語的定式化では、名詞のジェンダーはその言語の中で固定され変更することができない。文法上のジェンダーは、欧米語圏の哲学的・宗教的伝統の特徴である二項対立の原理を反映したものである。一方、日本や東アジアの言語には文法上のジェンダーが存在しない。日本語圏に於いて、この言語上の要素の欠如が文法以外の一般的なジェンダー概念の認識をどのように反映しているのか、あるいはそれに影響しているのか、この疑問は今後の課題である。

二項対立の考え方は、ジェンダーに関する人類学の理論に大きく影響した。シェリー・B・オートナーの古典的理論である「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？（Is Female to Male as Nature to Culture?）」では、「女性の価値が普遍的に低い（universal devaluation of women）」のは女性が男性よりも自然に近い存在であるのに対し、男性は文化に結びついているという社会的な認識によるものと説明している。つまり、男性は広く普遍性と公的領域を表象すると捉えられているのに対し、女性は個別性を表し、周縁の私的領域に追いやられているのである⁽⁴⁾。女性の場合、「ジェンダー・ロール」と「セックス・ロール」が混同されることが多く、これは出産を女性の当然の役割とする「解剖学的宿命」の考え方が定着していることに起因する。自然と結びつけられた女性

のジェンダー・ロールは、既存の社会的・経済的価値のヒエラルキーに合致しているのである。オートナーの定式化は広く受け入れられたが、「文化」という概念自体が創り出されたものであると主張するポスト構造主義者などからは激しい反論が起きた。⁽⁵⁾

1986年に発表されたジョン・W・スコットの論考「Gender: A Useful Category of Historical Analysis」(『ジェンダーと歴史学』所収)は、欧米語圏の歴史叙述に新たな活気をもたらし、「言説論的転回 (discursive turn)」に向けた大きな転機となった。⁽⁶⁾ 1990年出版のジュディス・バトラーの『Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity (ジェンダー・トラブルフェミニズムとアイデンティティの攪乱)』も、既存のジェンダーの概念の中に異性愛者のバイアスを顕在化させたという点で重要である。同書ではセクシュアリティと性自認を考察し、異性愛主義の二元的な考え方を取り除き、ジェンダーの行為遂行性の結果としてアイデンティティを再概念化している。これまで個人の性のアイデンティティについては、作られるものか、本質的なものかという二項対立の中で議論されていたが、この新しい思考法の中でジェンダーの概念と実践は二元的な考え方を超え、生まれつきの性別とは別のものであると解釈されている。「男性」「女性」という用語は不安定な言語的アイデンティティであり、時間と場所によってパフォーマンスタイプかつ変容的である。このような考え方は、LGBTQをはじめ、トランスジェンダーや第三の性、Xジェンダーといったジェンダーやセクシュアリティに関する語彙の誕生において一役を担ってきた。この概念化の中で「ジェンダー」は人間を広く捉え、「女性」か「男性」かという2つに限定された分類を遥かに超えるものである。⁽⁷⁾

「歴史展示にはジェンダーがどのように表象されているか」という問いを検討する際、トビー・ディッツの見解が参考になる。2004年、ディッツはそれまでのジェンダーに関する議論では、ジェンダー化された存在として「女性」ばかりに焦点が当てられていたと指摘した。⁽⁸⁾ この状況を説明するため、ディッツは1970年代から始まった女性学の発展を辿った。研究初期には、活発な学術的運動によって歴史叙述における女不在が指摘され、その大きな穴を埋めることで是正が試みられた。この取り組みの中で歴史学者は「男のジェンダーを隠蔽した (suppressed the gender of their male subjects)」。歴史学は常に男の権力や権威、特権を叙述し、男としての覇権的立場を検証する試みさえなかった。すなわち、男に対する見方は、

「ジェンダー化された人としてではなく、人間の普遍的な強い願望としてであった。過去の歴史叙述を顧みると、歴史対象のジェンダー化された権力とその対象の文化の中で定義された男のアイデンティティは、自然なものとしてあまりにも巧みに取り入れられた (naturalized so effectively)」ために、「それ自体の呼称がないようだった (seemed without names of their own)」⁽⁹⁾

女性を研究する歴史学者は、「女を見つける」だけでなく、男、男らしさ、男性性を再概念化し、政治的・経済的・文化的構造における男の特権的な地位を探ることによって、従来の歴史を壊す必要性を少しずつだが認識するようになった。

日本ではこの数十年、歴史学、社会学、法学、言語学、哲学、美術史、文学などの人文学や社会

科学の多くの学問領域で、ジェンダー研究を重要な調査・分析手法として取り入れてきた。⁽¹⁰⁾しかし、ジェンダー研究の発展は必ずしも順調なものではなかった。第一に日本語には「文法上のジェンダー」がなく、「ジェンダー」という用語は外来語として存在している為、意味がすぐ理解できるように受容化する必要がある。発音をカタカナで書き表した「ジェンダー」には、その用語独自の明解な認識論的権威性を示す生成能力がない。「ジェンダー」という日本語は、英語の gender に組み込まれた概念を表象しているのかもしれないが、英語の gender 自体が批評を受けて変容を続けている。そのため、この用語が「完全な市民権」を得るのはなかなか難しく、狭い学術的議論の外ではなおさら難しい。10 年ほど前には、「ジェンダー・フリー」という用語が日本で発明され、メディアの注目を集めたことがあったが、この用語は、構造上の障害物がない空間について一般的に使用される「バリアフリー」の「フリー」の概念をジェンダーに適用して生まれ、日本語特有の意味を提供した。⁽¹¹⁾

また、英語の gender は、この用語に伴う状態を説明する能力という点でも、日本語の「ジェンダー」とは異なった形で機能する。英語の場合、「ジェンダー」は現在進行形 (gendering: ジェンダー化) で使用されることが多く、さらに多いのが受動態 (gendered: ジェンダー化された) での使用である。以下がその事例である。

公式の権限は、たとえ女性がその立場にあったとしても、ほぼ常に男ジェンダー (gendered male) として見られ、家事は、たとえ男性が担っていた場合でも、ほとんどが女ジェンダー (gendered female) として認識される。また、貧困は女性を不利にする方向にジェンダー化 (gendering of poverty) する。一因として、リプロダクティブ・ヘルス (性と生殖に関する健康) と収入源の不安定さが上げられるだろう。

このような語形変化は、個人の固定されたアイデンティティというよりもむしろ、ジェンダーを言説的に認識する過程を表している。現段階で日本では、「ジェンダー」は個人のアイデンティティに近く、社会構造や政治構造をジェンダー的な用語で表現することは困難に思われる。残念なことだが、大学や政治の世界、実業界、メディアのほか、ほとんどの仕事の場では、それぞれの高度にジェンダー化された環境や文化を表現するジェンダーの概念が真摯に取り入れられていない。この点は世界経済フォーラム公表の 2017 年「ジェンダー・ギャップ指数」にも表れており、日本は 144 カ国中、114 位である。もっとも、米国は 49 位にすぎない。博物館の展示において英語や日本語でいうところの「ジェンダー」を公正に表象する必須条件は、展示企画やインスタレーションにおいて、確固たるジェンダー的視点を示し、かつこれを支持する博物館の組織的環境が整っていること。また、それとともに、社会におけるジェンダー的な意味を来館者が意識的・無意識的に理解していることも望まれる。⁽¹²⁾

②…………… 表象

「歴史展示にはジェンダーがどのように表象されているか」という問いの 2 つ目の問題点は、「表

象」という概念である。「女」や「男」,「田んぼ」,「骨」といった語とは異なり,「ジェンダー」は具体的に目で見ることができない。抽象的な概念であるジェンダーは,博物館という限られた空間の中では,選別された資料の性質や展示の様式,展示に伴うキャプション,また特定の展示物と他の展示物との関連性などの総合的な企画を通して,意識的に来館者に提供されるだろう。

広い意味でいうならば,歴史的な遺物も含め,あらゆる作品は,制作された時点でジェンダー化されているといえよう。例えば,制作者のジェンダーを考えてみる。制作者が女であった場合,その作品は女にジェンダー化されているのだろうか。あるいは男が作成しても,明らかに女が使用することを意図している場合にはどうなるのだろうか。「歴史展示にはジェンダーがどのように表象されているか」という問いについて私たちが検討するのは,男か女かという展示物のジェンダーではない。展示が示唆する権力の分配,テイスト,消費,文化的権威,社会的認識,そしておそらくは精神性といったものにジェンダー関係を見いだせるだろう。博物館の展示はジェンダー化された歴史の側面をさまざまな様式で見せるもので,それが来館者の想像力を掻き立てるだけでなく,自身が生きる現代社会に向かい合う考えや姿勢,また,洞察も刺激すると思われる。展示物と展示方法を通して,ジェンダーの意味合いを発信し,理想的には,来館者が,たとえ無意識でも,ジェンダーに対する何らかの認識を体験する——そこに歴史展示にジェンダーを表象する意味があるのだろう。

一般的に歴史博物館では,男が制作した工芸品の方が女が制作した作品より多い。日本の場合,女によって書かれたものや描かれた作品は,他の多くの国と比較すると相対的に豊富に存在するが,やはりそれ以上に多くの作品・資料は男によって作られ,男の活躍を表したり,男の目を通した女を描いたりしている。制作者のアイデンティティは,ジェンダーを意識した分析や表象の可能性を必ずしも損なうものではないが,制作する男も表象されている男も,ともにジェンダー化されていること,また,女だけがジェンダーを「表象する」存在ではないことを意識しておくことが大切である。これまでジェンダー研究では女をその対象として捉えることが多かった。しかし,歴史的背景をジェンダー的に理解することは関係性を問うことであり,特定の状況下での女の不在は,女が存在する場合と同様にジェンダー分析の素材となる。

一例が中世の合戦図である。仮に巻物に描かれているのが男の武士だけであれば,それはジェンダー的にどのような意味を示しているのであろうか。なぜ女は合戦の場に不在なのか。合戦に役立つ人員として,例えば,荷馬の御者や食料を調達する者としての描写は,何故無いのか。女性を調達任務の場面に登場させると,その絵が伝えようとしている「男の世界」という幻想の構築を損ねることになるのであろうか。

別の例として,展示機会が多い江戸時代の参勤交代の様子を描いたパネル屏風がある。しかし,筆者は,参勤交代の男を描いたパネルと並べる形で,近松門左衛門が浄瑠璃に描いたような,国元で留守宅を守っている女や参勤交代に加わらなかった男,子どもらの生活を描いた展示をまだ見たことがない。合戦図や行列の絵図は,特に男中心の職業との関連で男独自の男らしさというものを実際立たせることになったのであろうか。いずれにせよ,描かれているのが男か女かを問わず,キャプションや効果的な強調・配置を通じて資料のジェンダー的要素を明らかにし,ジェンダーが「読める」展示を来館者に提供するのが,キュレーターの手腕が問われるところであるし,歴史博物館

の使命でもあろう。

日本の例の次に、ジェンダー視点や解釈手法を最近活発に取り入れ、既存の理論を問い直すことで、学術的な実践を積んできている考古学分野について述べる⁽¹³⁾。考古学における新しい理論は、先史時代のコーナーで考古学に関係する展示を行う歴史博物館にとって、有用で意味深い。「ジェンダー考古学」といわれるこの学問の目的は、ジェンダーや民族その他の人間の特性を無視するエコシステム・パラダイムを批判しようとするものである。既存の考古学は、ジェンダーなどの文化固有の細目に科学的測定は利用できないとし (Culturally specific details, including gender, were thought to be inaccessible to scientific measurement), 「全ての人間は資源の生産者かつ消費者として概ね代替が可能 (largely interchangeable producers and consumers of resources)⁽¹⁴⁾」, 或いは、ジェンダー・ロールを決めるのは、人間の生態で「骨格の性別判定は単純明快 (sexing skeletons is simple and straightforward)」であり、「ジェンダーは問題にならず、特に注目するに値しない (gender is unproblematic and unworthy of special attention)」という理論にたっている⁽¹⁵⁾。これに新しい旋風を送ったジェンダー考古学は、「ジェンダー」という概念も語彙も存在しなかったときでさえ、歴史的遺物はジェンダー化されていると仮定している。無論、私たちとは異なる時代や場所で作られた展示物のジェンダーの特性やその意味は、私たちに馴染みのあるパターンとは異なる。故に過去のパターンを紐解く上で、アリソン・ワイリーは、次のような注意を促す。

女が従属的な立場にあるとする現代のジェンダー神話は、女を男のカテゴリーに組み込もうとする中で現れる。そこでは古代農耕社会での女の役割に対して現代の考え方が投影され、古代の女の役割はすべて男と比べて劣っていると不当に解釈する傾向がみられる⁽¹⁶⁾。

言い換えると、狩猟は農耕よりも価値のある経済活動であると見なすことは、ジェンダー・ロールに対する現代のステレオタイプな物の見方を反映したもので、狩猟者である男が、政治的にも経済的にも農耕をする女よりも優る権力を持つのは当然と考えられていた。ジェンダー考古学者は、このような基本的ともいわれる考古学の解釈を、ジェンダー視点と手法を取り入れることによって覆している。

オーストリアの博物館

ジェンダー考古学者が過去に対する既存の解釈を批判的に捉える中、博物館学の研究者は博物館展示における有史以前のジェンダー・ロールについて調査を行った。ここで取り上げる例は、日本以外の国のことだが、その間いの内容は文化や時代を越えて、あらゆる展示を批評するのに意義深いと思われる。オーストリアで実施された一プロジェクトでは考古学の常設展示に関して、以下の質問を投げかけた。

(1) オーストリアの先史 および原始時代の常設展示は、ジェンダー関連の問題点を来館者に示唆できているか。

(2) 常設展示では先史時代および原始時代の男女の役割について解説しているか。

(3) これらの問題点をどのような方法を用いて、どの程度の効力をもって、社会に発信している⁽¹⁷⁾か。

このプロジェクトの実施にあたって研究者は、ある仮説を立てて調査を行った。その仮説とは「展示はジェンダー関連の問題点を明示することはほとんどないが、黙示的にはしばしば取り上げており、それによって社会にこの問題を提示している。そして、提示される主たる概念は『伝統的な』ジェンダー関係である」というものである⁽¹⁸⁾。2009年から2015年の間にオーストリアの8つの展示について実施された調査では、そのキャプションを計量テキスト分析を用いて文書化・分析した。分析には分類法とコーディングシステムを適用し、デジタル化したテキストについてジェンダー関連の解説の頻度、特定の解説を行った理由、そして特定の活動や日常生活の光景が特定のジェンダーに結びついているか否かを評価した⁽¹⁹⁾。また、特定の活動や展示物に結び付けた男女のアイデンティティについて、説明をしていないテキストもコード化した。その一例が武器を手にした人間で、人類学的な分析や科学的根拠がないにもかかわらず、常に男として同定されていたケースである⁽²⁰⁾。

テキストに加えて絵図についても分析するため、表象されている男女の数、描かれている活動やその頻度のほか、誰が何をどの程度の頻度で行っているか尋ねた。また、分類法を構築して「生存活動」「社会生活」「ジェンダー」の3つのカテゴリーに分類し、各項目をさまざまな活動に結びつけた。生存活動には、農業（収穫、耕起）、漁、食料の生産・調理・保存、水汲み、物々交換、運搬、陶器の製造、採掘、狩猟、建造・木工作业などを含めた。社会生活には、芸術、余暇、儀式、喜怒哀楽、発見、食事、指導力、衛生意識、騎乗、戦争行為、一緒に時間を過ごすこと、おしゃべり、給仕など、幅広い活動を含めた。そして各活動と結びつけるジェンダーとして、子ども、女性、女性と推定、男性、男性と推定、不明に分けた。

絵図から女17名、男41名、子ども3名を取り上げ分析した。その結果、社会生活と生存活動のいずれの場合も、女より男に関係する活動の方が多く描かれていることが分かった。女の活動は男ほど活発ではなく、その範囲も狭かった。また、活動によってはひとつのジェンダーに限定されて行われていた。女特有の活動が食料の生産と給仕である一方、男は農業（詳細不明）、漁、採掘、耕起、騎乗、荷馬などを操ること、物々交換、戦争行為などの幅広い作業に関係していた⁽²²⁾。

以上を踏まえ、研究者は集めた予備データから現代のステレオタイプ、すなわち「典型的」と思われるジェンダー・ロールの表象が確認されると結論づけた。しかし、ジェンダーの間での違いも見られた。男の場合、採掘や金工、指導力の発揮、高い競争力など、男にジェンダー化された「典型的」な活動に取り組む場面が頻繁に表象されていたのに対し、女にジェンダー化された機織りや料理といった「典型的」な役割が描かれているケースはほとんどなかった。むしろ女の場合には、座っている様子やおしゃべりなど、一般的に生産的ではない場面が描かれていた。女は経済面や政治面のみならず、生存活動や技能を要する活動においても表象されることが少なく、重要性も低い。女はごく限られた活動に従事し、強い影響力を持った人物として女を描いたものはなかった。このように限られた役割の中での女性像は、来館者にあたかも女が存在しなかったかのような印象を与えるのではないだろうか⁽²³⁾。

上記の3つの質問について、研究者は展示でジェンダー関連の問題を取り上げていることを確認

したが、その程度は博物館によって異なっていた。ジェンダー・ロールに関する解説の有無については、ナラティブな展示の方が、そうではない展示よりも解説が多く、後者は解説を避けていることが明らかになった。また、ジェンダーの問題を社会に発信しているかという質問については、ナラティブではない展示は、ナラティブな展示よりも解説が少なく、仮にメッセージを伝えるにしても、直接的に表現することは稀で、示唆するに留まっていることが分った。結論として、研究者は調査開始にあたって立てた仮説が正しいことを概ね確認したが、博物館によってばらつきがあった。確認されたパターンとしては、ステレオタイプな女性像の表象や、政治・経済・生生活動などの特定の活動の中で重要性が低いことを示す女性像などがあった。

この調査はオーストリアの博物館を対象とした先史時代のジェンダーの表象に関するものであるが、研究者は同様のパターンが世界各地の博物館でも見られるのではないかと考えた。この推定は、特に農業中心の生態系の中に所在する博物館が詳しく調査してみるとよいであろう。例えば、日本の場合のように、歴史の中で生産、儀式、指導力の面で女が大きな力を発揮した先史時代の社会を取り上げている博物館が、記述や絵図に見られるジェンダーの表象をオーストリアの事例と比較してみてもどうだろうか。

マンチェスター博物館

次に英国のマンチェスター博物館（正式名称はマンチェスター大学附属博物館）の事例について考えてみる。同博物館は男ジェンダー中心の展示室を是正するため思い切った策を講じ、ジェンダー面に対等な展示への改革を目指した。この試みで対象としたのは、人間以外の哺乳類や鳥類、爬虫類などが主な自然史の展示室である。この試みがジェンダー分析として異例なのは、人間に関する現代のジェンダー概念を人間以外の生物の表象と結びつけて検証している点にある。この調査を実施したレベッカ・メイチンの目的は、「女性の来館者が自己の人間性をフルに感じられない感覚」を取り除くことであった。メイチンにとって、展示室は来館者に情報を伝えるとともに、インスパイアすることを目的とし、特に留意すべき事は、都市に住む者にとって陳列されている動物は、それが生きているか標本であるかを問わず、動物を見ることができるとして唯一の機会である。したがって、「展示物を通して、地球上の生命体の多様性を表象し、それを来館者に印象づけるのは、キュレーターの義務と責任である」⁽²⁵⁾。

メイチンによると、自然史博物館の大半が、1つの種について雄と雌の両方を展示していないという。全ての脊椎動物には繁殖の必要上、明確な雌雄の違いがある（一部の例外を除く）。性的二形は種によって異なり、外形や行動においてその違いが大きいものもあれば、生殖器以外にほとんど違いが見られないものもある。こうした違いは進化する上での戦略であって、それが子育てのような行動の違いに結びつく。雄と雌の違いが大きい場合には、その両方を展示すべきである。しかし、以下の分析が示す通り、博物館には雌よりも雄の方を多く展示する傾向がある。

メイチンは、現代博物館の展示の中には昔ながらの、時には時代遅れの人類の進化論や生物学的決定論に基づいて動物の社会生活を説明しているものがあることから、こうした展示を特に懸念していた。そこで、どのようなジェンダー化されたストーリーが発信されているのか把握するために、動物の展示の中でも特に雌の展示に焦点を当てて調査を行った。

マンチェスター大学付属博物館は英国のマンチェスター大学の一角にある。中には1882年から1888年にかけて作られた動物学の展示室があり、「直近では1991年に至るまでの間に幾度となく展示内容を変えてきたにもかかわらず、壮麗なヴィクトリア朝の様相 (Victorian grandeur) 」を留めている⁽²⁷⁾。収蔵品には60万體以上の標本が含まれ、2階にある哺乳類の展示室と3階にある鳥類の展示室には、ほとんどの標本が剥製または骨格標本の形で保管されている。標本の多くは博物館が創設されたときに購入されたもので、展示物の変更は恣意的に行われている。展示を刷新することは難しいかもしれないが、陳列の方法やキュレーター⁽²⁸⁾の解説を変えることは可能だとメイチンは断言する。

メイチンは哺乳類と鳥類の標本に焦点を当てて調査し、(1) 陳列されている雄と雌の標本数、(2) 表象されている種のうち、雄単体の標本数、雌単体の標本数、子ども単体の標本数、雄・雌両方の標本数、雄・雌・子どもの標本数、雌と子どもの標本数、雄と子どもの標本数、(3) 1つの種について雄と雌の両方が陳列されている場合には雄と雌の配置とそれぞれのポーズ、(4) ジェンダーに関する解説テキストに含まれる情報内容および雌と雄それぞれに言及する際に使用されている言語をそれぞれリストアップした⁽²⁹⁾。その結果、哺乳類の雄と雌の標本総数の比率は71%対29%で、およそ公平なジェンダーの表象とは言い難いものであった上、雄と雌の両方が陳列されていたのは6%にすぎないことが分った。一方、鳥類の陳列比率は雄66%に対して雌34%であった。次に種別の比率を数えると、哺乳類展示室では、雄単体の標本で表象されていた種が61%を占めたのに対し、雌単体の標本種は11%、雄と雌の両方が陳列されていた割合は14%であった。鳥類については、展示されている種の44%が雄単体、32%が雌単体で、雄と雌の両方が陳列されていた割合は全体の48%を占め、哺乳類の展示を上回っていた⁽³⁰⁾。

この数字の不均衡はどこからくるのだろうか。ひとつの理由は歴史的背景にある。動物の性別によって大きさや色が違う場合、雄の方が大きく色も鮮やかなのが一般的である。19世紀から20世紀初頭にかけては、種の収集が、この要素に影響されて行われ、博物館に収蔵された。狩猟者にとっては色鮮やかで大きい方が動物として魅力が高いため、これらを探し求め、捕獲し、収集する傾向が強かった⁽³¹⁾。また、雄を仕留める方が雌よりも難しいため、雄を倒すことで狩猟者の男らしさが認知されるということも背景にあった。アメリカ自然史博物館のエイクリー・アフリカ哺乳類ホールを調査したドナ・ハラウェイによると、そこに展示されている哺乳動物は「その動物を仕留めた (白人) 男性の男らしさの認知 (the perceived masculinity of the (white) men involved)」と「雄の標本こそ、その種の見本だとする一般的な認識 (the perception that the male specimen [was] the true exemplar of species)」を反映したものだ⁽³²⁾という。マンチェスター大学付属博物館にはエガートン卿 (1874 - 1958) がアフリカで仕留めた22頭の哺乳動物が展示されているが、雌はそのうち4頭だけである。ある意味で現代の博物館の収蔵品は、ライオンからトラ、象、ゴリラに至るまで、より大きく、より華やかな獲物を追い求めることを是とする古い価値観の保管庫と言えるのかもしれない。さらにメイチンは、雄こそが本物の標本であるとするならば、雌は雄という標準から逸脱した存在ということになると指摘している。この捉え方はジェンダー研究において、男性が広い領域を表象し、女性は狭い周縁領域を表象するという二項対立のパラダイムに一致する。

メイチンは、種の性による形の違いが、雄と雌で著しく大きい場合には、雄と雌の両方を展示す

べきであると言う。アンテロープの一種であるニアラはこのケースに該当する。しかし、マンチェスター博物館では、過去にはニアラの雄と雌の両方を展示していたが、近年では雄だけが展示されていた。そこでメイチンは倉庫に保管されていた雌の標本を抜き出して展示することにした。来館者は今では「ニアラや他のアンテロープの一つの種に存在する多様性を認識する (realize the intraspecies diversity of Nyalas and other antelopes)」ことができるようになった。雌のニアラには白い縞があるが、雄には模様がないのだ。



©Getty Images



©Joel Sartore/ National Geographic Photo Ark

ニアラの雄だけを展示していたことから、雌の標本の一時的な展示が求められたが、それだけに留まらず、別の形での画期的な介入も行われた。メイチンらは全ての雄の標本を白い布で覆い、世界で最も小さいアンテロープの一種で、雄と一緒に展示されていたキルクディクディクの雌だけを残した。この種には性的二形がほとんどないため、キルクディクディクの雌を雄と一緒に展示する理由がメイチンには見当たらなかった。もしあるとすれば、その極小サイズゆえに展示スペースをほとんど取らないということだけであった。⁽³³⁾ 布で覆った展示については、こうした介入の理由の説明をつけた。⁽³⁴⁾

一方、鳥類の展示室では雄と雌両方の展示割合が哺乳類と比べて大きかったが、問題はその展示方法であった。メイチンが展示ケース内の鳥の配置を入念に観察したところ、雄の方が雌よりも高い位置に展示されていた割合は全体の 74% に上った。また雄の方が体を起こし、優位を誇示するポーズを取っている傾向が強かった。キュレーターが必ずしも剥製のポーズに責任があったわけではなく、剥製師が雌を下の方に配置し、地面の方を向かせるなどのポーズを作っていたこともあった。メイチンはこうした展示パターンへの注意を促すために、分かりやすい例となる展示ガラスの正面に白い円を描いた。⁽³⁵⁾

また、哺乳類展示室の入り口に掲げたキャプションにも問題があった。その説明が雄と雌のステレオタイプな役割を助長するような内容だったのだ。それを示す例としてメイチンは、「力の強い雄にはハーレムがある」、「雄の縄張りには50頭ほどの雌からなるハーレムがある」などのキャプションを挙げた。⁽³⁶⁾このような解説は、雌にはハーレム形成の主体的役割がなく、ハーレム形成が相互愛プロセスの結果である事を示していない。また、雌が雄や他の雌あるいは集団をどう捉えているかについても説明はない。そこでこのような表象のアンバランスを是正するために、トラの展示ケースの正面ガラスにキャプションをつけることで介入を行った。例えば、「雄は雌を巡って争うが、闘いに勝つのは多くの場合、血のつながりがあると思われる二頭が協力しあったときである」といった内容や「雄と雌のいずれも縄張りがあり、匂いや幹をひっかくことでマーキングして縄張りを主張する。雄の縄張りは大きく、複数の雌の縄張りを含むことも多い」というものであった。⁽³⁷⁾このような解説を付け加えたことで、雌のトラにも一定の主体性があることを示したのである。

メイチンは哺乳類と鳥類の展示室内のキャプションに使われている親に関する文言も調査した。鳥類の展示室では「親鳥」というニュートラルな言葉が使われていることが多かったが、哺乳類の場合には、「雌」や「母親」という言葉が同じ意味で使われていた。また、どちらの展示の場合にも「父親」という言葉は使われていなかった。一部の種については親の役割について触れていたケースもあったが、展示されている標本が雄の場合であっても、「親」を「父親」と示しているケースはなかった。

哺乳類と鳥類の次に人類生物学と進化を取り上げたセクションを調査したところ、ここでも男と女で扱いに差があることが分かった。メイチンの調査によると、人間を描いた絵のうち女はわずか13%で、初期の人類の場合はすべて男であった。ホモエレクトスのセクションでは、槍を手に火のそばにいる3人の男と洞窟の壁のそばに座っている女1人が描かれていた。ネアンデルタール人のセクションでは、子どもを抱いた女2人と狩猟から戻った男5人が描かれていた。「男性狩猟者」説は人類学者や考古学者から大きな批判を浴びたのだが、ここでは事実として提供されている。⁽³⁸⁾現生人類の陳列では、ほとんどのホモサピエンスが男で、解剖図はすべて男である。ただし、例外は女の生殖の解剖的構造図で、子宮と乳腺の構造を示したものであった。⁽³⁹⁾

マンチェスター博物館のプロジェクトは、哺乳類、鳥類、人類の表象に関して、いくつかの問題点を明らかにした。プロジェクトではジェンダーの均衡性 (gender equity) に焦点を当て、それは、例えば、性別による展示の割合や展示の方法などにおいて不均衡性が確認された。こうした格差は、欧米の帝国主義的な野望や植民地主義が絶頂期にあった19世紀後半に大型の雄の標本を収集したことから始まり、そこに白人男性の男らしさを是とする主張が加わった。その後、現代社会の男性優位の考え方が、雄と雌の陳列数の差や陳列ケース内での配置やポーズに影響を与えた。また、現代のステレオタイプなジェンダー・ロールが男性を狩猟者として、女性を育児者として描くことにもつながった。マンチェスター博物館は、陳列や説明テキストを介して「伝統的な」ジェンダー・ロールを社会に再認識させる役割を担っていたことになる。このステレオタイプな捉え方は、既述のシェリー・オートナーの論文で考察した、当時の主流パラダイムであったジェンダーの二項対立論の概念に見事に合致するものである。

③……………結論

新たな理論の模索

本シンポジウムではジェンダーに焦点を当てているが、もうひとつの分析手法である「インターセクショナリティ」も、歴史学から法学、人類学、政治学に至るまでさまざまな学術分野で急速に発展してきた。インターセクショナリティは、米国発祥ではあるものの、国・地域を問わず歴史資料の研究手法を向上させる有効な概念ツールである。この用語は 1980 年代後半、米国の社会的・法的現実を実践的な視点で捉えるフェミニスト・クリティークと呼ばれる批評の中で登場した。キンバレー・クレンショーは 1989 年発表の論文「Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics」の中で、「人種とジェンダーを、経験と分析において、二つの相互排他的カテゴリーとして扱う傾向」が、いかに黒人女性を人種とジェンダーの両域で周縁化することにつながっているか詳述した。そしてこれまでの分析手法では社会的従属や社会的不利を、クレンショーがいう「単一のカテゴリー軸」、すなわち人種かジェンダーのどちらか一方に沿って生じるものとして捉えていたと解説している。つまり、ジェンダー研究では白人女性、人種研究では黒人男性という主要集団を対象とする傾向にあった。こうした手法は「分析の対象を集団の特権的なメンバーの経験に限定することによって、黒人女性を人種と性差別の概念化、認識化、改善過程から消していった。」⁽⁴⁰⁾といえる。言い換えると、ジェンダー研究と人種研究のいずれも、黒人女性特有の条件を、主要集団の経験に基づいて構築した大規模な分析的枠組みの中に組み込んでいたことになる。このようにして、「インターセクショナリティ」は当初、黒人女性の周縁化の問題をジェンダー研究と人種研究の中で取り上げていた。この理論の登場以降、「インターセクショナリティ研究」は、学問領域や政治手法の中で広がりを見せただけでなく、ラテン系民族やネイティブ・アメリカンの女性、アジア人女性など、ほかにも周縁化された人種・民族集団を含む広いコンテキストの中で重要になってきている。それを受けて、例えば歴史学者は人種とジェンダーが労働市場の階級や民族集団に対する国家の規制、生殖様式と家族形成、職場の差別的な文化などどのように関係しているか調査した。また、一部の研究はこの点を、植民地主義や帝国主義、新自由主義などの国際関係との関連で考察した。⁽⁴¹⁾インターセクショナリティの概念の正確な定義とその利用については議論があるものの、この理論は、特に「単一のカテゴリー軸」としてのジェンダー、階級、人種、性オリエンテーションなどの研究枠組を超えて、特定の社会的・政治的状況における力の不均衡が多層に重なり合う形態を分析し、そこにある支配的な力の拠点や観点を明らかにするのに役立つだろう。どの国においても、有効な分析手法である「インターセクショナリティ」論は、博物館展示においても、展示資料に添って、分かりやすい説明を取り入れることで、ジェンダーだけではなく、更に深く、過去のみならず、現代の社会を考えるきっかけになるかもしれない。

博物館の表象と所属組織のジェンダー・エクイティーとの相関関係

オーストリアの博物館とマンチェスター博物館の事例はいずれも、他の博物館に陳列の再考を促す注意喚起の役割を果たしている。ジェンダー概念、その均衡性〔エクイティー〕を博物館運営の確固たるコンセプトとしない限り、ステレオタイプ化された現代のジェンダー・ロールのパターンに簡単にはまってしまう。先史時代と原始時代に関するジェンダー・ロールの認識は、国や文化によって異なると考えられる。例えば日本では、女性が国を治めたことは考古学的にも文字史料からも証明されている。また、海に近い集落であれば、狩猟は特に重要視されなかったとも考えられる。こうしたことから、日本の先史時代の展示にはメイチンが明らかにしたようなジェンダー格差は見られないものと思いたい。しかし、ジェンダーの展示のあり方を決定するのは過去ではない。キュレーターをはじめ展示をプロデュースする人たちのジェンダーに対する高い意識である。

ジェンダー考古学者は、解釈手法と所属組織のジェンダー不均衡性との間の直接的な関係を認識している。ケリー・ヘイズギルピンによると、1960年代になっても、考古学の世界は、男ジェンダーとみなされた学問的環境において、活動や発掘を行い、女を足手まといな存在と受け止めていたという。1980年代になってもなお多くの大学では、女の考古学教授は皆無で、ジョアン・ゲロによれば（米国の）考古学界では「白人、中流階級、男」の三拍子が揃った人間が優位を占めていた⁽⁴²⁾。したがって、ジェンダー重視の考古学に向けた変革を推進するためには、所属組織の中でジェンダー重視の意識をもった研究者が一定数に達する必要がある。このことは何も考古学領域に限ったことではなく、歴史学を含むすべての学問領域にとって重要であるのは言うまでもない。要するに、「歴史展示にはジェンダーがどのように表象されているか」という問いに答えるためには、所属組織におけるジェンダー・エクイティ（均衡）推進の必要性を認識することが鍵となろう。そうして初めて刺激のある表象の促進につながり、「伝統的な」ステレオタイプを問題視し、その結果、来館者をインスパイアすることが可能となる。

註

(1)——Lois H. Silverman, *The Social Work of Museums* (New York: Routledge, 2010), p. 3.

(2)——世界経済フォーラム公表の2017年「ジェンダー・ギャップ指数」で日本は144カ国中114位。*The Japan Times*, 2017年11月1日付。

(3)——言語学者のベンジャミン・アイト・ウィーラーによると、ジェンダーの分類すなわち「文法上のジェンダー」は、印欧語、セム語、北コーカサス語、さまざまなアフリカの言語の中にみられるという。Benjamin Ide Wheeler, "Grammatical Gender," *The Classic Review* 3.9 (Nov., 1889), pp. 390-392.

(4)——Sherry B. Ortner, "Is Female to Male as Nature Is to Culture?" in *Woman, Culture & Society*, edited by Michelle Zimbalist Rosaldo and Louise

Lamphere (Stanford, CA: Stanford University Press, 1973), pp. 67-87. (邦訳 シェリー・B・オートナー著、三神弘子訳「女性と男性の関係は、自然と文化の関係か？」エドウィン・アードナー他著・山崎カヲル監訳『男が文化で、女は自然か：性差の文化人類学』晶文社、1987、所収)。

(5)——Carol P. MacCormack and Marilyn Strathern, eds., *Nature, Culture and Gender* (New York: Cambridge University Press, 1980). 1981年にはオートナー自らが、*Sexual Meanings: the Cultural Construction of Gender and Sexuality* (Sherry B. Ortner and Harriet Whitehead, eds., New York: Cambridge University Press, 1981)の中で、ジェンダー・イデオロギーの生成と変容について疑問を呈した。

(6)——Joan W. Scott, "Gender: A Useful Category of Historical Analysis," *The American Historical Review* 91.5 (Dec., 1986), pp. 1053-1075. (邦訳 ジョーン・W・スコット著、萩野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社 1988 年)。強力な分析カテゴリーとして、人種・民族・セクシュアリティと共にジェンダーが、教育機関などの社会的意識の高い機関の方針策定に組み込まれている。

(7)——Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York: Routledge, 1990). (邦訳 ジュディス・バトラー著、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社 1999 年)。

(8)——Toby L. Ditz, "The New Men's History and the Peculiar Absence of Gendered Power: Some Remedies from Early American Gender History," *Gender & History* 16.1 (April 2004), pp. 1-35.

(9)——Ditz による Joy Parr の "Gender History and Historical Practice," *The Canadian Historical Review* 76 (1995), p. 367. からの引用。Ditz, p. 2.

(10)——例えば、『Gender and Sexuality』や『ジェンダー史学』などのジャーナル所収の論文。

(11)——この議論はやがて学校のトイレを中心に公衆トイレの問題に発展した。おそらく「ジェンダー・フリー」のトイレには男女を表す標識がないのだろうが、これは学校職員や保護者にとっては、受け入れ難いコンセプトだったようだ。伊藤公雄「男女共同参画」が問いかけるもの—現代日本社会とジェンダー・ポリティクス』『ジェンダー・フリー』という言葉—誤解と混乱を越えて』、東京：インパクト出版会、2009、170～199 頁。

(12)——日本の主要大学の歴史・考古学部における、教授や准教授といった指導的立場にいる女性の割合は、教員全体の 10～20%を上回らない。

(13)——1990 年、オーストラリアのチャールズ・スタート大学で Women in archaeology conference (考古学女性会議) が開催され、以下を含む 38 の研究論文が発表された。Gender as a dimension in archaeological theory; The Pleistocene and physical anthropology, removing the stereotypes; Cultural resource management and gender issues; Women in the archaeological career structure; Women in the archaeological workplace. Hilary du Cros and Laurajane Smith, "Women in Archaeology Conference: A Feminist Critique of Archaeology," *Australian Archaeology* 32 (Jun., 1991),

pp. 39-40.

(14)——このパラダイムは 1950 年代終盤から 1980 年代初頭にかけて主流であった。Kelly Hays-Gilpin, "Feminist Scholarship in Archaeology," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* vol. 571: *Feminist Views of the Social Sciences* (Sept., 2000), p. 93. 一部の学者は、ジェンダー考古学は過去の学問的傾向を批判するには至っていないとみている。ジェンダー考古学はメインストリームに対する姿勢に傷をつけ、「フェミニスト」の理論化を避けたとして批判されている。Ericka Engelstad, "Much More than Gender," *Journal of Archaeological Method and Theory* 14.3 (Sept., 2007), pp. 217-234.

(15)——Hays-Gilpin, p. 93.

(16)——Alison Wylie, *Thinking from Things: Essays in the Philosophy of Archaeology* (Berkeley, CA: University of California Press, 2002), p. 185. ちなみに、筆者はこれは、文化と生態系によって異なる価値観であり、日本社会では別の価値観があると認識している。

(17)——Kerstin Kowarik and Jutta Leskovar, "Women without History? History without Women? Studies on the representation of prehistoric gender roles in Austrian exhibitions," *Les nouvelles de l'archéologie* 140 (2015), p. 1.

(18)——Kowarik and Leskovar, p. 1.

(19)——2015 年の時点で、5 つの展示について文書化と分析の完了を待っている状態だった。Kowarik and Leskovar, p. 2

(20)——Kowarik and Leskovar, p. 3.

(21)——質的データ分析には MAXQDA のソフトウェアが使用された。Kowarik and Leskovar, p. 5.

(22)——Kowarik and Leskovar, pp. 6-10.

(23)——Kowarik and Leskovar, p. 10.

(24)——Kowarik and Leskovar, p. 11.

(25)——Rebecca Machin, "Gender representation in the natural history galleries at the Manchester Museum," *Museum and Society* 6.1 (March 2008), pp. 54-55.

(26)——Machin, p. 55.

(27)——Machin, p. 55.

(28)——Machin, p. 55.

(29)——Machin, p. 56. 残念ながら多くの標本についてその性別を判定することはできず、観察によって性別が判定できない成体については調査対象から外した。その

結果、哺乳類展示室のわずか18%と鳥類展示室の43%しか調査対象に含めることができなかった。

(30)—— Machin, pp. 57-58.

(31)—— Machin, pp. 54-55. ドナ・ハラウェイは著書“Teddy Bear Patriarchy: Taxidermy in the Garden of Eden,” *Social Text* 11 (Winter, 1984-85), pp. 36-37の中で、19世紀剥製術の巨匠カール・エイクリーと関連づけながら狩猟と剥製術の理念について述べている。

(32)—— Machin, p. 57; Haraway, p. 37.

(33)—— Machin, p. 58.

(34)——これは米国内においてAIDSに関する意識向上に使われた手法だった。来館者がテーマについて考え、話し合うきっかけとなるという点でこの手法は有効である。Machin, p. 59.

(35)—— Machin, p. 59.

(36)—— Machin, p. 60.

(37)—— Machin, pp. 61-62.

(38)—— Alison Wylie, “The Engendering of Archaeology: Refiguring Feminist Science Studies,” *Orisis* 12 *Women, Gender and Science: New Directions* (1997), pp. 80-99. ワイリーは、排他的「男性狩猟者」説を裏付ける証拠はないと科学的見地から主張している。男女ともに狩りに武器を使っており、武器を多用途に使っていたことを示す証拠もある。ワイリーは、考古学の調査結果は学者間で「社会政治学の実践に還元でき(reducible to the sociopolitics of practice)」、調査結果

を導き出した「根拠の形態と権威には透明性がなく、それらが発生する社会的背景を構成する力関係と無関係ではない(whose form and authority are never transparent and never innocent of the power relations that constitute the social contexts of their production)」として注意を促している。P. 86

(39)—— Machin, p. 61.

(40)—— Kimberle Crenshaw, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics,” *The University of Chicago Legal Forum* 140 (1989), pp. 139-140. インターセクショナリティは法学者が、構造が硬直的で、下位の交差パターンを考慮する余地のない米国の差別禁止法の論理を分析するための手段であった。

(41)—— Sumi Cho, Kimberle William Crenshaw, and Leslie McCall, “Toward a Field of Intersectionality Studies: Theory, Applications, and Praxis,” *Signs* 38.4 (2013), pp. 785, 805.

インターセクショナリティの概念は現在の政治情勢に対する我われの理解に密接に結びついたものであり、大学が推進している多様性・平等・包摂(DEI: Diversity, Equity, Inclusion)方針などの取り組みに近い。

(42)—— Joan M. Gero, “Sociopolitics and the Woman-at-Home Ideology,” *American Antiquity* 50 (1985), p. 344. Kelly Hays-Gilpin, p. 93. において引用。

(ミシガン大学歴史学部教授)

(2018年12月7日受付, 2019年2月6日審査終了)

Gender Studies and Challenges of Historical Exhibitions

TONOMURA Hitomi

This article responds to the question posed by the National Museum of Japanese History: How is gender represented in historical exhibitions? Adopting the perspective that the purpose of museum exhibitions is to serve and inspire the public, the article considers how the museum can develop an effective way to incorporate gendered thinking and methods as it plans its exhibition, represents its artifacts and narrates the materials. The article first clarifies the concept and usage of the term “gender” and then introduces examples of gendered interpretations of archaeological findings and museum of exhibitions.

The term “gender” cannot be easily translated into Japanese. Partly because there is no native Japanese term to translate “gender” into, the meaning of *jendā* in katakana syllabary remains opaque. Moreover, in Japanese, *jendā* tends to refer to a person’s individual identity, not transformative social or institutional situations, making it difficult to incorporate gendered thinking into effective social change toward greater gender equity.

After considering the theoretical advance made by the so-called gender archaeologists, the article turns to a quantitative textual analysis of captions displayed at an Austrian exhibition and an innovative measures taken to expose the highly gendered practice that was found at the Manchester Museum. According to the analysis in Austria, humans carrying tools were typically assumed to be men, and women were involved only in a limited range of activities, with little contribution to political, economic, and survival activities. In the case of the Manchester Museum, there were more exhibits of males than females, and it was found and at both museums, that the stereotype modern gender roles were being socially reaffirmed through the displays and captions.

Useful in addressing these issues is the concept of intersectionality, which goes beyond research frameworks such as gender, class, and race to examine how power imbalances in certain social and political contexts are compounded. Moreover, to avoid importing stereotyped modern gender roles into exhibitions, it is essential that the number of researchers who realize the importance of gender increases and that museums recognize the need to promote gender equality as an organization.

Key words: Gender and museums, representation, gender roles, intersectionality, gender equity

Gender Studies and Challenges of Historical Exhibitions

ジェンダー研究と歴史展示の課題

TONOMURA Hitomi

トノムラ ヒトミ

- ① What is gender, or *jendā* ?
- ② Representation
- ③ Conclusion

In the words of international museum scholars, museums today aspire to “be socially responsible” as they enrich the lives of individuals and provide services to their communities.⁽¹⁾ Historical museums play a crucial role in disseminating knowledge to the public through mediated representations of historical images and stories. They can serve as a forum for visitors to reflect on their own time and society by engaging with artifacts and visual materials that were generated by the minds of the past. By asking the question, “How is gender represented in historical exhibitions?,” the ongoing project at the National Museum of Japanese History addresses a critical issue that is eminently relevant not only to scholarly trends, but also to the social and political climate that prevails in Japan.⁽²⁾ But the answer to this question is complicated. To begin with, the term “gender,” the central focus, is difficult to define. Its meaning and use have been transforming since its entry into mainstream academic discourse in the 1980s. Moreover, we need to consider the meaning and application of the term “gender” when it is transplanted to Japan and becomes “*jendā*,” its Japanese-language equivalent.

❶.....What is gender, or *jendā* ?

“Gender” became a forceful concept in the vocabulary of anthropologists and other social scientists in the 1960s and 1970s through the feminist movement and the rise of interdisciplinary women’s studies programs across North American campuses. Scholars rigorously sought to differentiate “gender” from “sex.” The latter was understood to be a biological characteristic that, in the 1970s, was fixed for each person. In contrast, gender, as an identity, was socially constructed, perceived, and alterable.

Prior to this development, “gender” may have been known mostly as a grammatical marker found in languages such as French, German, Greek, and Latin.⁽³⁾ Gender marks nouns as masculine, feminine, or neuter. For example, in French, “le musée (the museum)” and “un livre (a book)” are masculine and “la mer (the sea)” and “une fleur (a flower)” are feminine. In this linguistic formulation, gender of the noun is fixed and immutable in that language. The system of grammatical gender reflects the principle of duality or dichotomy that characterizes the Western philosophical and religious traditions. Japanese and other East Asian languages lack grammatical gender. In what ways this factor reflects or influences the general perception of gendered differences is a question that remains to be investigated.

Dichotomous thinking governed influential anthropological theories of gender. Sherry B. Ortner’s classic formulation, “Is Female to Male as Nature to Culture?” explains “the universal devaluation of

women” as a result of social perception that women are closer to nature than men, who are associated with culture. Men are seen to represent the universal and the public sphere, while women are relegated to the particularistic, marginal and the private sphere.⁽⁴⁾ For women, “gender roles” were often confused with “sex roles” due to the prevailing idea that “anatomy is destiny” and their role as child-bearers. Women’s gendered roles, associated with nature, fit the existing hierarchy of social and economic worth. Ortner’s formulation, widely accepted, nonetheless generated vigorous counter arguments from post-structuralists, for example, who insisted that the notion of “culture” itself is constructed.⁽⁵⁾

The 1986 publication of “Gender: a useful category of historical analysis” by Joan W. Scott brought a new excitement to Western-language historical writing, which was experiencing a major shift toward a “discursive turn.”⁽⁶⁾ In 1990, the publication of Judith Butler’s *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, importantly exposed the heterosexual bias in the existing concept of gender. In association with the notion of sexuality and sexual identity, the book dismantles the binaries of heterosexism and reconceptualizes identity as a result of gender performativity. Previously, one’s sexual identity was debated within a dichotomous framework of constructed versus essential, but in the new way of thinking, the concept and practice of gender exceeds the binary and is understood to be unrelated to the sex one is born with. “Male” and “female” are unstable discursive identities. It is performative and transformative according to time and place. This line of thinking has helped to spawn new vocabulary of gender and sexuality, such as Transgender, Third gender, and Exgender, alongside LGBTQ. “Gender” in this conceptualization views human beings broadly, far beyond the two limited categories of “women” and “men.”

Perhaps most useful for considering the question of how gender is represented in an exhibition is the reminder by Toby Ditz who, in 2004, proclaimed that, until recently, the discussion of “gender” was overly focused only on “women” as gendered beings.⁽⁸⁾ Ditz explains this condition by tracing the development of women’s studies beginning in the 1970s. Initially, the vigorous scholarly movement noted the absence of women in historical narratives and sought to remedy it by filling the gaping gap. In this effort, historians “suppressed the gender of their male subjects.” Historical writings had always showcased men’s power, authority, and privilege; men’s hegemonic position called for no new examination. Ditz reiterates this position: men were seen as

universal human aspirations, not as gendered persons. Qualities that in retrospect might have been attributed to the historical subjects’ gendered power and to their culturally defined masculine identities were ‘naturalized so effectively’ in historical writing that they

'seemed without names' of their own.⁽⁹⁾

Historians of women only slowly came to recognize the need to deconstruct conventional history, not only by “finding women” but also by reconceptualizing men, manliness, and masculinity, and by exploring their privileged position in political, economic, and cultural structures.

In Japan in the last several decades, many disciplines in the humanities and social sciences, such as history, sociology, law, linguistics, philosophy, art history, literature, and legal studies have adopted gender studies as a significant method of investigation and analysis.⁽¹⁰⁾ The development of gender studies, however, has not been always smooth. First, whereas the Japanese language has no grammatical gender, the term “gender” has remained a borrowed foreign term, *gairaigo*. It is a term in need of domestication to make it immediately intelligible. Written in *katakana* phonetics, “*jendā*” is without a generative ability to offer a clear epistemological authority of its own. “*Jendā*” may represent ideas embedded in “gender,” but “gender” itself has undergone critiques and continues to transform. It has been difficult for the term to acquire “full citizenship”, especially outside the small circle of academic discussion. We can recall, about ten years ago, that the term “gender-free” (*jendā furī*) was introduced and led to much media attention. It was interpreted as a parallel concept to “barrier-free,” a term typically used for a space with no structural barriers.⁽¹¹⁾

The English term, “gender,” also functions differently from the Japanese term, “*jendā*,” in its ability to explain a condition associated with it. In English, the term “gender” is often used in the present progressive form, “gendering” or, more often, in a passive form, “gendered.” For example:

Formal authority is nearly always **gendered** male, even if a female occupies the position, and housework is mostly **gendered** female even if a man does it. **Gendering** of poverty is a predictable outcome when women lose insurance coverage for reproductive health.

Instead of a static identity, these forms show the process by which gender is discursively determined. In Japan at this time, “*jendā*” is closely aligned with a person’s identity, and it seems difficult to express a social and political structure in gendered terms. It is regrettable that universities, the political arena, corporate world, media, and most other work places rarely incorporate seriously the concept of gender to describe their highly gendered climate or culture. This is reflected in the World Economic Forum Gender Gap Index for 2017, which ranks Japan as 114th among 144 countries, although the USA is unimpressive 49th. Perhaps equitable representations of gender or *jendā* in any museum exhibitions hinge on the institutional climate that generates and supports sound gendered

perspectives in planning and installation, not to mention the visitors' own conscious and unconscious understanding of gendered meanings in society.⁽¹²⁾

②.....Representation

The second challenging component of the initial question, “how is gender represented in historical exhibitions” is the notion of “representation.” Unlike the terms “women,” “men,” “rice field,” or “bone,” “gender” is not concretely visible. It is a concept and, as such, it can become intelligible to exhibition viewers by a combination of factors, such as the character of the selected material, mode of installation and, importantly, explanations in the accompanying captions. A particular installation's relationship to other displayed objects is also important because it necessarily takes place within the space of the museum, which is limited.

It could be said that, in the broadest sense, all objects, including historical ones, are gendered when they are made. We can consider the gender of the creator, for example. If the creator is female, is the item female gendered? What if the object was created by a man but is clearly intended for use by a woman? In asking “how gender is represented in historical exhibitions,” what we want to consider is not necessarily the gender, as in male or female, of the object or installation, but gendered relations or the distribution of power, taste, consumption, cultural authority, social recognition, or perhaps spirituality. Installations offer a view of a multitude of patterns in the gendered dimensions of our historical past, which in turn may stimulate the visitor's imagination for alternative models and, perhaps, reflection and insights into their present. Ideally, curatorial practices enable objects to impart gendered meanings as a memorable, if unconscious, dimension for the complete experience of visitors.

For all historical museums, it is easier to find artifacts that were created by men than by women. In the case of Japan, compared to many societies, written and visual sources produced by women are, relatively speaking, plentiful. But many more materials were created by men and show men's activities or depict women through a male gaze. The identity of the creator does not need to diminish the possibility of gender-conscious analysis and representation. It is important to remember that men are gendered; women are not the only ones who “represent” gender. Gender analysis often has viewed women as its target. Instead, a gendered understanding of a historical context is relational, and the absence of women in a particular setting is as much a source of gendered analysis as is the

presence of women.

An example is the depiction of medieval battles. If a scroll painting shows only male fighters, what gendered meanings does it generate? Why are women absent, or when they are depicted, why are they not portrayed as productive members engaged in warfare, for example, as carriers on a packhorse or suppliers of food ration? Would the inclusion of a woman in a task of procurement reduce the masculinity that the scroll hopes to convey? How does the scroll shape an illusion of “man’s world”?

Another example is the frequently displayed panels of men in alternate attendance (*sankin kōtai*) in the Edo period. I have yet to see an exhibit that shows, alongside the panel depicting men in procession, the lives of women, other men, and children, back home while they managed the house for an extended period, even as Chikamatsu Monzaemon wrote several plays on conditions in the home. Did the war scrolls and paintings of processions accentuate the exclusive masculinity of men in their relation to the particularly androcentric professions? Whether or not the depicted material shows males or females, it is the curator who assigns the material gendered meanings through notations or effective emphasis and placement.

Moving away from the Japanese case, I turn now to the recent gender-oriented research and interpretive methods in the field of archaeology, which has been gradually transforming the disciplinary practice by questioning various old theories.⁽¹³⁾ These ideas, I find, are relevant to historical museums because they also exhibit archaeological installations in their prehistoric sections. Typically called “gender archaeology,” they seek to criticize, for example, the ecosystems paradigm that ignores gender, ethnicity, and other human characteristics by treating “all humans as largely interchangeable producers and consumers of resources. Culturally specific details, including gender, were thought to be inaccessible to scientific measurement.”⁽¹⁴⁾ Similarly, another theory posits biology determined gender roles; “sexing skeletons was simple and straightforward,” and “gender is unproblematic and unworthy of special attention.”⁽¹⁵⁾ Instead, gender archaeologists posit that historical objects are gendered even if “gender” was neither a concept nor a vocabulary then. Produced in time and place different from our own, gender characteristics of displayed artifacts and their possible meanings diverge from the patterns we are familiar with. In interpreting the past patterns, Alison Wylie warns that:

Modern gender mythology of women’s subordinate status appears in the way that women are subsumed into male categories, the manner in which contemporary attitudes about activities associated with women in ancient agrarian societies are projected onto the past, and the unwarranted tendency to interpret all women’s roles in the past as inferior or subordinate to those of men.⁽¹⁶⁾

In other words, assessing animal hunting as a more valuable economic activity than planting seeds might be a reflection of the modern stereotyped view about gender roles, that men-the-hunter are more powerful politically and more valuable economically than women-the-seed sower. Gender archaeologists seek to deconstruct the stereotyped myths by introducing alternative interpretive methods.

Austrian museums

As gender archaeologists have critically assessed existing interpretations of the past, some scholars have studied prehistoric gender roles in museum exhibitions. Although these studies take place in countries other than Japan, the kinds of questions they ask seem relevant to the assessment of any exhibitions across cultures and time periods. One project in Austria looked at permanent archaeological exhibitions by asking three questions.

- (1) Do permanent exhibitions on pre- and protohistory in Austria raise gender relations issues?
- (2) Do these exhibitions make statements about the roles of men and women in pre- and protohistory?
- (3) How are these issues presented to the public? By what means? On what level? And in what intensity?⁽¹⁷⁾

The scholars in the project approached the study with certain hypotheses: that “gender related issues are rarely explicitly addressed, but frequently implied and thus presented to the public. The predominant concepts presented are ‘traditional’ gender relations.”⁽¹⁸⁾ In research from 2009 through 2015, they documented and analyzed textual captions at eight exhibitions in Austria using the quantitative content analysis. They applied a classification and coding system, and evaluated the digitized text for the frequency of gender-related statements, the background reasons for why specific statements were made, and if specific activities and aspects of daily life were linked to a specific gender.⁽¹⁹⁾ They also coded text sections that provide no explanations for the identification of either men or women for a specific activity or association with an item. An example is individuals with weapons who were consistently identified as male with no anthropological analysis or other scientific reasons.⁽²⁰⁾

In addition to texts, the researchers also analyzed images by asking how many men and women are represented, what activities are depicted and how often, and who does what and how often.⁽²¹⁾ They developed a three part categorization scheme—subsistence, social life, and gender categories—and linked each to various activities. “Subsistence” included, among various functions, agriculture (harvesting, plowing); fishing; food production, preparation, and preservation; fetching water; trade; transport; ceramic production; mining; hunting; and building and wood work. “Social life” included a

large variety of activities such as art, being idle, ritual, emotions, discovery, eating, leadership, personal hygiene, riding a horse, warfare, spending time together, talking, and serving. Gender categories for linking the activities were child, female, probable female, male, probable male, and unknown.

The images they analyzed featured 17 women, 41 men and 3 children. They found that more types of activities were attributed to men than to women in both social life and subsistence categories. Women were shown to be less active and had a narrower field of action. Some activities were done by one gender only. Women-specific activities were some food production and serving. Men were associated with a variety of tasks, such as agriculture (unspecified), fishing, mining, plowing, riding/⁽²²⁾ driving, trading, and warfare.

In summary, the researchers conclude that their preliminary data confirms representations of many stereotyped, or what are considered “typical,” gender roles today. But there were gender differences. Men are represented more frequently undertaking the “typical” male-gendered activities than are women, including mining, metal work, exerting leadership, and being competitive. Women rarely were portrayed as taking “typical” female-gendered roles, such as weaving, or cooking. Rather, women were portrayed as sitting, talking, and generally not being productive. Women are underrepresented and held less importance in subsistence and craft activities, as well as in the economic and political spheres. They engaged in a narrow set of activities and no images of strong or influential females appeared. For visitors, women’s limited roles would give an impression that women hardly existed.⁽²³⁾

The researchers answered the three initial questions by affirming that the exhibitions raised gender-related issues, but in varying degrees depending on the museum. Whether or not the exhibitions made statements about gender roles, researchers found that narrative-type exhibitions offered more statements than non-narrative exhibitions, which avoided making statements. As for the question regarding communicating gender issues to the public, researchers found that non-narrative exhibitions made fewer statements than narrative exhibitions, but all in all, the messages, if any, were rarely direct, but implicit.⁽²⁴⁾ In conclusion, the researchers determined that their initial hypotheses were mostly affirmed, though with variations from one museum to another. The patterns they discovered included stereotyped representations of women, and the lesser importance of women in certain activities such as politics, economy, and subsistence activities.

While the investigation of prehistoric gender representations at museums in Austria is locally

based, the researchers nonetheless projected that similar patterns are likely seen internationally. This is a supposition that could be explored, especially by museums located in different, and more agriculture-based, ecological systems. How does a museum, such as one in Japan, which features a prehistoric society, with historically powerful female roles in production, ritual, and leadership, compare with the Austrian example in its gender representation in narration and images?

The Manchester Museum

I now turn to the case of Manchester Museum in the United Kingdom, which took dramatic measures to correct its androcentric galleries and sought to transform them into more gender-equal displays. This study differs from others because the subject of investigation is the natural history galleries, and the installations being examined are those of non-humans, including mammals, birds, and reptiles. This study is unusual in its consideration to implicitly associate the contemporary gendered representations of humans to those of other species in the museum. The goal of the investigator, Rebecca Machin, was to eliminate “a feeling of disenfranchisement amongst female visitors.” She emphasized that the role of the galleries is to inform and inspire visitors. For many city dwellers, the displayed animals are the only opportunity they have to see animals, dead or alive. Therefore, “there is a curatorial obligation or responsibility to explain the collections on display and to encourage visitors to reflect on the extent to which displays properly represent difference and diversity with respect to life on earth.”⁽²⁵⁾

Machin observed that most natural history museums do not show animal diversity by presenting both the male and female of a species. All vertebrates have a clear male-female distinction, since both sexes are needed for reproduction (with some exceptions). Sexual dimorphism varies among species: in appearance and behavior, some differ greatly and others hardly distinguishable except for their genitalia. These are evolutionary strategies that are linked also to their behavior, for example, parental care of the young. When the male and the female are very different, both sexes should be shown to visitors. But museums tend to show more male species than the female, as the following analysis shows.

Machin was particularly concerned about the contemporary museum displays, which may perpetuate the old-fashioned and sometimes outdated theories of human evolution and biological determinism in explaining the social lives of animals.⁽²⁶⁾ Consequently, she examined exhibitions of animals, especially focusing on female, to understand what gendered stories were being disseminated.

The Manchester Museum is part of the University of Manchester in the United Kingdom. It has

zoology galleries, which were constructed in 1882-1888 and retain its “Victorian grandeur despite various updating of displays, most recently in 1991.”⁽²⁷⁾ The collections comprise over 600,000 specimens. The mammal gallery is on the first floor and the bird gallery is on the second floor, where most specimens are preserved as taxidermy mounts and in osteological material. Many of the specimens were acquired when the museum was founded, and the possibility of changing the content is pursued only opportunistically. New displays may be difficult, but Machin asserts that the mode of display and curatorial interpretation can be changed.⁽²⁸⁾

Machin’s investigation focused on mammal specimens and birds. She listed (1) the number of female and male specimens on display; (2) the number of species represented by male specimens alone; female specimens alone; juvenile specimens alone; both male and female specimens; male, female and juvenile specimens; female and juvenile specimens, and male and juvenile specimens; (3) positioning of male and female of one species when they were both present, and their postures; (4) the information provided in interpretative text relating to gender, and the language used when referring to female and male individuals.⁽²⁹⁾ Her first finding was that the display ratio of male and female mammals was 71% to 29%, hardly equal-gender representation. Only 6% were represented by both male and female specimens. For birds, a male-to-female ratio was 66% to 34%. For the mammal gallery, 61% of species were represented by male specimens alone, while 11% of species were represented by female specimens alone. 14% of specimens included both males and females. For the birds, 44% of species were represented only by males, and 32% were represented by females alone. Males and females together were displayed in 48% of the groupings, more than in the mammal galleries.⁽³⁰⁾

What is the reason for this numerical imbalance? One reason is historical. When the two sexes’ size and color vary, typically the male is larger and more colorful. This factor affected how species were collected and placed in museums in the nineteenth and early twentieth centuries. Hunters found the bright colors and the large size of the animals to be more attractive and were more likely to hunt and collect them.⁽³¹⁾ Hunting male specimens was more challenging and thus affirmed hunters’ masculinity more than hunting female specimens. According to Donna Haraway, who studied Carl Akeley’s African Hall in the American Museum of Natural History, the animals collected and displayed there reflected “the perceived masculinity of the (white) men involved” and “the perception that the male specimen [was] the true exemplar of species.”⁽³²⁾ The Manchester Museum’s mammal display has 22 mammals collected by Lord Egerton (1874-1958), who hunted avidly in Africa. Of 22, only 4 are female. We might say today’s museum collections are, to an extent, depositories of past values that sought the bigger and brighter games, from lions, tigers, and elephants to gorillas. Moreover, as Machin notes, if the male specimen is seen as the true sample, the female specimen is a deviation from the standard male. This perception fits the notion of the dichotomous paradigm in gender

studies that the male represents the universal and female the particular or marginal.

If the sexual dimorphism of a species makes the male and the female strikingly different, both sexes should be displayed. The nyala, a type of antelope, fits this category. Although a male and female pair had been on display in the past, now only a male was displayed. Machin decided to bring out a female specimen that was in storage. Now visitors could “realize the intraspecies diversity of Nyalas and other antelopes.” Female nyalas have white stripes whereas the males are plain.



©Getty Images



©Joel Sartore/ National Geographic Photo Ark

The dominance of male representation of species in the antelope case not only called for bringing out the female specimens to a temporary display case but also another form of dramatic intervention. Machin and others covered up all the male specimens with white sheets, leaving visible the only female Kirk’s dik dik, one of the smallest antelope species, which was accompanied by a male specimen. Machin saw no reason why this female was displayed alongside the male, because there is little sexual dimorphism in this species. It is explainable only by its miniature size that took up little space. With sheets in place, they wrote an explanation for this intervention.⁽³³⁾⁽³⁴⁾

The bird gallery had a much larger ratio for displaying both male and female specimens. The question was how they were displayed. Machin looked closely at the birds’ positions in the case. Males were positioned higher than females in 74% of the displays. Males also tended to be more erect and in a dominant posture. Curators were not always responsible for the positions of the birds. Sometimes the taxidermist shaped the female bird in a subordinate position, looking down toward the

ground, for example. Machin placed white circles on the glass in front of the obvious examples, in order to draw attention to the particular display patterns.⁽³⁵⁾

Captions posted at the entrance to the mammal gallery also were found to be problematic: the text promoted stereotyped roles of male and female specimens. Machin offers examples of statements such as “The more powerful males have harems” and “Males with a territory have harems of about 50 females.”⁽³⁶⁾ Statements such as these imply that females have no agency in the formation of the harem, which is the result of a courtship process. There is no explanation as to how females view the male, other females, or the group. In order to correct the imbalance in representations, the gallery intervention took the form of a label text on the glass in front of the tiger exhibits. The text stated: “Males compete for females, and the successful ones are often two cooperating males that are probably related.” In addition, “Both sexes hold territories which they mark by scent and by scratching trees. The males’ territories are large and often include the territories of several tigresses.”⁽³⁷⁾ The additional text provided some agency to the female tigers.

Machin examined the wording regarding parenthood in both mammals and birds galleries. Bird galleries often used the neutral word “parent.” In the mammal galleries, “female” and “mother” were used interchangeably, but the word “father” never appeared in either gallery. Although the parenting role of certain species was noted, the “parent” was never noted as “father” even if the specimen was a male.

Moving away from mammals and birds, a section of the museum that featured human biology and evolution also showed gender-differentiated treatment of men and women. Machin found that only 13% of the pictures of humans were females; early human species were all men. The section on *Homo erectus* showed three men holding spears by a fire and a woman sitting by the cave wall. Next, the picture of *homo sapiens neanderthalensis* featured two women with children and five men returning from hunt. The “man-the-hunter” image has received much criticism from anthropologists and archaeologists alike, but is perpetuated as fact.⁽³⁸⁾ In the display of modern humans, most of the *homo sapiens* are male, and the anatomical drawings are all male, except the female reproductive anatomy, that is, the diagrams of uteri and mammary glands.⁽³⁹⁾

The Manchester Museum’s project has exposed a number of issues in its representation of mammals, birds, and humans. The project focused on gender inequity, which was found in the numerical proportion and modes of display of male and female specimens, for example. The disparity began with the collection of mostly large male specimens in the late nineteenth century, at the height

of Western imperialistic ambitions and colonialism, which was accompanied by vigorous assertion of white men's masculinity. The modern androcentric view dictated the comparative weight given to the male and female species and their relative positions and postures within the display cases. Modern stereotyped gender roles governed the depiction of men as hunters and women as children's caretakers. The Museum served the public by reaffirming the "traditional" gender roles through the displays and explanatory texts. These stereotypes fit remarkably well with the concept of gender binaries, which was the mainstream paradigm discussed in Sherry Ortner's article, mentioned above.

③.....Conclusion

Exploring new ideas

While gender is the focus of this symposium, another mode of inquiry, "intersectionality," has been developing rapidly in various academic disciplines, from history and law to anthropology and political science. It is a useful conceptual tool that helps to sharpen one's approach to historical materials anywhere, despite its origin in the United States. The term was introduced in the late 1980s in practice-oriented feminist critiques of the social and legal realities of the United States. In her 1989 article, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," Kimberle Crenshaw spelled out how "the tendency to treat race and gender as mutually exclusive categories of experience and analysis" results in marginalizing black women in both. She explains that past practices have viewed social subordination and disadvantages as occurring along what she calls a "single categorical axis," that is, either race or gender. These practices have "erased black women in the conceptualization, identification and remediation of race and sex discrimination by limiting inquiry to the experiences of otherwise-privileged members of the group."⁽⁴⁰⁾ In this way, "intersectionality" initially addressed the problem of the marginalization of black women within the study of gender and of race, each of which tends to target the dominant group—white women in gender studies and black men in race studies—as the main focus of analysis. In other words, both in gender studies and race studies, the particular conditions of black women are subsumed under the larger analytical framework built on the experiences of the dominant group. Since the introduction of this idea, "intersectionality studies" have flourished in academic disciplines and in political practice, and become relevant in other contexts that include other marginalized racial or ethnic groups, such as Latinas, Native American women or Asian women. For example, historians have examined how race and gender interact with class in the labor

market, the state's regulatory rules toward ethnic groups, modes of reproductive and family formation, discriminatory work place culture, and so on. Some consider it in the context of international relations, such as colonialism, imperialism, and neoliberalism.⁽⁴¹⁾ Despite debates over the exact meaning and utility of the notion, "intersectional" thinking has fostered consideration of multiple overlapping dynamics of power imbalance in particular social and political contexts. Relevant to any country, "intersectionality" can help to reveal the dominant perspective that may subordinate certain groups within the well-meaning studies of gender, race (or ethnicity), or class. In museum installations, the incorporation of clearly articulated intersectional thinking may broaden the understanding of gender dynamics in the character of the exhibited materials.

Correlations between museum representations and workplace gender equity

Both the Austrian museums and the Manchester Museum's examples serve as a fair warning to any museum to reflect on its displays. As long as gender equity is not a definitive concept in the established operations of a museum, it is too easy to slip into the pattern of modern stereotyped images of gender roles. It is possible that perceived gender roles for pre- and proto-history may differ from one country or culture to another. For example, Japan's prehistory offers archaeologically and textually certifiable female chieftains, and hunting animals might have been less valued in a society with sea long coasts. This could mean exhibitions of Japan's prehistory would not suffer from the kind of gender disparity Machin revealed. On the other hand, it is not the past that determines how gender comes to be displayed. It is the gender-consciousness of the curators and others who produce the exhibitions.

Gender archaeologists see a direct relationship between the mode of interpretation and the gendered inequity in their workplaces. According to Kelly Hays-Gilpin, as late as in the 1960s, the discipline saw women as distractions in the masculine activities and social-setting of excavations. Many universities had no women archaeology professors as late as the 1980s and enjoyed what Joan Gero calls (in the context of the United States) "white, middle-class males' domination of the profession of archaeology"⁽⁴²⁾ Therefore any transformation toward more gender-oriented archaeology would occur only when there was a critical mass of gender scholars in their institutions. Needless to say, this need is not specific to the discipline of archaeology but relevant to all academic fields, including history. In conclusion, one might answer the original question, "How is gender represented in museum exhibitions" by acknowledging the need to foster gender equity in work place in order to offer stimulating representations, which can inspire the visitors instead of accepting "traditional" stereotypes.

 annotation

- (1) — Lois H. Silverman, *The Social Work of Museums* (New York: Routledge, 2010), p. 3.
- (2) — The World Economic Forum placed Japan at 114th out of 144 countries in 2017 gender equality index. *The Japan Times*, November 1, 2017.
- (3) — According to Benjamin Ide Wheeler, a linguist, gender classification, or “grammatical gender,” appears in the Indo-European, the Semitic, the North-Caucasian, and various African languages. Benjamin Ide Wheeler, “Grammatical Gender,” *The Classic Review* 3.9 (Nov., 1889), pp. 390–392.
- (4) — Sherry B. Ortner, “Is Female to Male as Nature Is to Culture?” in *Woman, Culture & Society*, edited by Michelle Zimbalist Rosaldo and Louise Lamphere (Stanford, CA: Stanford University Press, 1973), pp. 67–87.
- (5) — Carol P. MacCormack and Marilyn Strathern, eds., *Nature, Culture and Gender* (New York: Cambridge University Press, 1980). In 1981, Ortner herself raised questions about production and transformation of gender ideology in Sherry B. Ortner and Harriet Whitehead, eds., *Sexual Meanings: the Cultural Construction of Gender and Sexuality* (New York: Cambridge University Press, 1981).
- (6) — Joan W. Scott, “Gender: A Useful Category of Historical Analysis,” *The American Historical Review* 91.5 (Dec., 1986), pp. 1053–1075. As a powerful analytical category, gender, along with race, ethnicity, and sexuality, is incorporated into policy formulations by educational and other socially aware institutions.
- (7) — Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York: Routledge, 1990).
- (8) — Toby L. Ditz, “The New Men’s History and the Peculiar Absence of Gendered Power: Some Remedies from Early American Gender History,” *Gender & History* 16.1 (April 2004), pp. 1–35.
- (9) — Ditz quotes Joy Parr, “Gender History and Historical Practice,” *The Canadian Historical Review* 76 (1995), p. 367. Ditz, p. 2.
- (10) — For example, articles in journals such as *Gender and Sexuality*, and *Jendā shigaku* (Gender History).
- (11) — The discussion turned to the issue of public toilets, especially in schools. Presumably, “gender-free” toilets would have no gender labels, a notion that was threatening to school officials and parents. Itō Kimio, “Jendā furī to iu kotoba: gokai to konran o koete,” *Danjo kyōdō sannkaku ga toikakeru mono: Gendai Nihon shakai to jendā porithikkusu* (Tokyo: Inpakuto Shuppan, 2009), pp. 170–199.
- (12) — A quick survey of history and archaeology departments in Japan’s major universities reveals women constitute about 10 to 20 percent of faculty in leadership positions, such as professors and associate professors.
- (13) — In 1990, “Women in archaeology conference” was held at Charles Sturt University in Australia where 38 papers were presented to address: Gender as a dimension in archaeological theory; The Pleistocene and physical anthropology, removing the stereotypes; Cultural resource management and gender issues; Women in the archaeological career structure; women in the archaeological workplace. Hilary du Cros and Laurajane Smith, “Women in Archaeology Conference: A Feminist Critique of Archaeology,” *Australian Archaeology* 32 (Jun., 1991), pp. 39–40.
- (14) — This paradigm was dominant in the late 1950s through the early 1980s. Kelly Hays-Gilpin, “Feminist Scholarship in Archaeology,” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science* vol. 571: *Feminist Views of the Social Sciences* (Sept., 2000), p. 93. For some scholars, gender archaeology does not go far enough to denounce the past trend. It has been criticized for its compromising stand toward the mainstream and for eschewing “feminist” theorizing. Ericka Engelstad, “Much More than Gender,” *Journal of Archaeological Method and Theory* 14.3 (Sept., 2007), pp. 217–234.
- (15) — Hays-Gilpin, p. 93.
- (16) — Alison Wylie, *Thinking from Things: Essays in the Philosophy of Archaeology* (Berkeley, CA: University of California Press, 2002), p. 185.
- (17) — Kerstin Kowarik and Jutta Leskovar, “Women without History? History without Women? Studies on the representation of prehistoric gender roles in Austrian exhibitions,” *Les nouvelles de l’archéologie* 140 (2015), p. 1.
- (18) — Kowarik and Leskovar, p. 1.
-

-
- (19) —As of 2015, they were still waiting the completion of documentation and analysis of five more exhibitions. Kowarik and Leskovar, p. 2.
- (20) —Kowarik and Leskovar, p. 3.
- (21) —They used Maxqda software for qualitative data analysis. Kowarik and Leskovar, p. 5.
- (22) —Kowarik and Leskovar, pp. 6–10.
- (23) —Kowarik and Leskovar, p. 10.
- (24) —Kowarik and Leskovar, p. 11.
- (25) —Rebecca Machin, “Gender representation in the natural history galleries at the Manchester Museum,” *Museum and Society* 6.1 (March 2008), pp. 54–55.
- (26) —Machin, p. 55.
- (27) —Machin, p. 55.
- (28) —Machin, p. 55.
- (29) —Machin, p. 56. Unfortunately, it was not possible to judge the sex of many of the specimens. She discounted from the survey any adult whose sex was not determinable by observation. Consequently, only 18% of the specimens in the mammal gallery and 43% of specimens in the bird gallery could be included.
- (30) —Machin, pp. 57–58.
- (31) —Machin, pp. 54–55. Donna Haraway describes the ideals of hunt and taxidermy in relationship to Carl Akeley, the master nineteenth-century taxidermist, in her “Teddy Bear Patriarchy: Taxidermy in the Garden of Eden,” *Social Text* 11 (Winter, 1984-85), pp. 36–37.
- (32) —Machin, p. 57; Haraway, p. 37.
- (33) —Machin, p. 58.
- (34) —This was a technique used for AIDS awareness in several places in the United States. The method is effective as it invites viewers to think and talk about the subject. Machin, p. 59.
- (35) —Machin, p. 59.
- (36) —Machin, p. 60.
- (37) —Machin, pp. 61–62.
- (38) —Alison Wylie, “The Engendering of Archaeology: Refiguring Feminist Science Studies,” *Orisis 12 Women, Gender and Science: New Directions* (1997), pp. 80–99. Wylie argues from a scientific standpoint that there is no evidence to support an exclusively androcentric “man-the-hunter” model. Evidence indicates a much more diversified use of weapons, as both women and men held weapons for hunting. She warns that the outcomes of archaeological inquiry are “reducible to the sociopolitics of practice” among scholars and derive from reasons “whose form and authority are never transparent and never innocent of the power relations that constitute the social contexts of their production.” p. 86.
- (39) —Machin, p. 61.
- (40) —Kimberle Crenshaw, “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics,” *The University of Chicago Legal Forum* 140 (1989), pp. 139–140. Intersectionality is a means for legal scholars to analyze the logic of American antidiscrimination law, which was rigidly constructed and did not consider the intersecting patterns of subordination.
- (41) —Sumi Cho, Kimberle William Crenshaw, and Leslie McCall, “Toward a Field of Intersectionality Studies: Theory, Applications, and Praxis,” *Signs* 38.4 (2013), pp. 785, 805. Intersectionality as a concept is closely linked to our understanding of the current political climate, and has affinity with initiatives such as policies around diversity, equity, and inclusion (DEI) promoted by the university.
- (42) —Joan M. Gero, “Sociopolitics and the Woman-at-Home Ideology,” *American Antiquity* 50 (1985), p. 344. Cited in Kelly Hays-Gilpin, p. 93.

(Professor, University of Michigan)